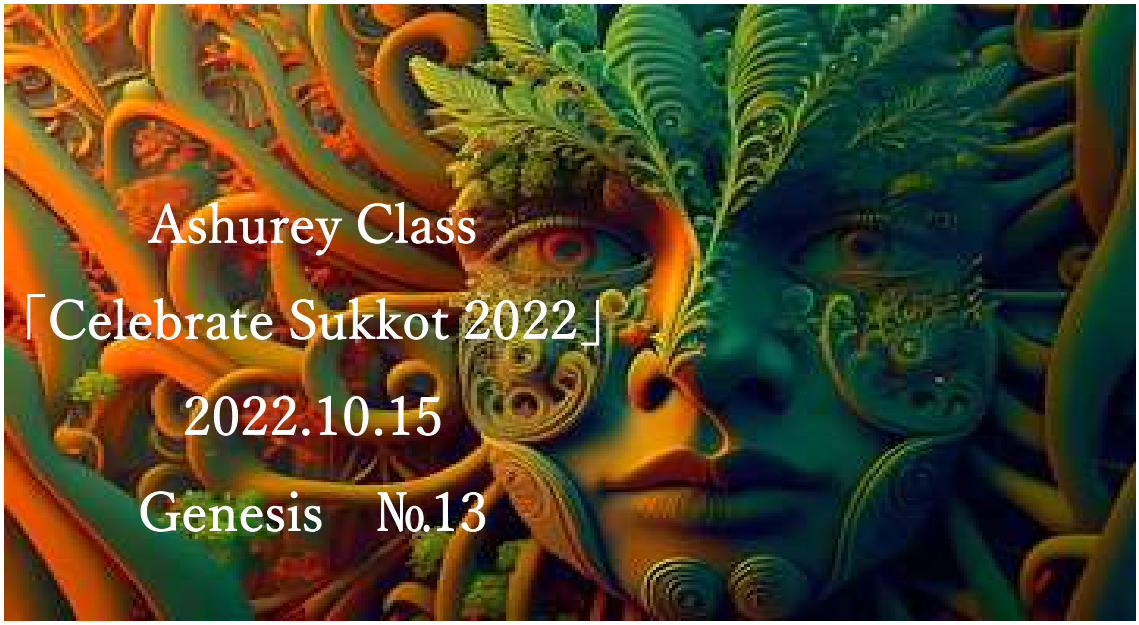
חַג הַסֻּכּוֹת

2022（5783）

בְּרֵאשִׁית

יג



ハッスッコート　　ハグ

חַג הַסֻּכּוֹת　仮庵の祭り

ベレーシート

בְּרֵאשִׁית

創世記 1 章 13 回目

29-31 節

見よ。わたしは、地の全面にある、

種のできるすべての草と、

種の入った実のあるすべての木を、

今あなたがたに与える。

あなたがたにとってそれは食物となる。

（創世記 1 章 29 節）

少し振り返ってみましょう。

第一日に、光אוֹר（オール）が呼び出され、

第二日は、大空רָקִיעַ（ラーキーア）が造られて天שָׁמַיִם（シャーマイム）と名づけられ、

第三日は、地אֶרֶץ（エレツ）と海 יַמִּים（ヤッミーム）が分かれ、地に植物דֶּשֶׁא（デシエ）が生えてきました。

第四日は、光る物מָאוֹר（マーオール）が天הַשָּׁמַיִם（ハッシャーマイム）の大空בִּרְקִיעַ（ビルキーア）に置かれ、

第五日は、水に群がりうごめく生き物חַיָּה（ハッヤー） נֶפֶשׁ（ネフェシュ）、翼のある鳥について学びました。

第六日は、地の生き物（家畜、這うもの、地の獣）は、すべて生物学的な生き物を表しているのではなく、これから展開されていく聖書のたとえとして語られていました。

今回取り上げる箇所は、創世記 1 章 29-31 節です。

29～30 節では、創造された人が食べる食物אֹכֶל（オフラー）が与えられ

ました。31 節は「見よ　それは非常に良かった

メオード　トーヴ　ヴェヒンネー

וְהִנֵּה־טוֹב מְאֹד」と、

神のご計画の喜びの宣言がなされています。

第一日	2～5 節	光	神は光を良しと見られた	夕があり、朝があった
第二日	6～8 節	大空(天)		夕があり、朝があった
第三日	9～10 節	地と海	神はそれを良しと見られた	
	11～13 節	植物	神はそれを良しと見られた	夕があり、朝があった
第四日	14～19 節	光る物(太陽・月・星)	神はそれを良しと見られた	夕があり、朝があった
第五日	20～23 節	水の中の生き物、 翼のある空の鳥	神はそれを良しと見られた	夕があり、朝があった
第六日	24～31 節	地の生き物 人と食物	神はそれを良しと見られた 見よ、それは非常に良かった	夕があり、朝があった

人が食べる食物も、たとえです。

一日が終わる毎に「夕があり、朝があった」

エハード　ヨーム　ヴォーケル　ヴァイエヒー　エレヴ　ヴァイエヒー

「וַיְהִי־עֶרֶב וַיְהִי־בֹקֶר יוֹם אֶחָד」

のリズムが繰り返されています。　そして、

第七日には「　夕があり、朝があった　」がなくて、

シャーヴァット

神が休んだשַׁבָּת という記述しかありません。

トーヴ　ハーアーレツ

そして、第二日だけ　良しטוֹבがないのは、その地הָאָרֶץが

ないからでした。神はとことん「その地הָאָרֶץ（ハーアーレツ）」にこだわっています。

今日は、生き物と、人が食べる食物が出てきます。

「 見よהִנֵּה（ヒンネー） それは非常に良かったמְאֹד（メオード） טוֹב（トーヴ）」です。

そうした状況を「見よ」と歓喜して、

それは非常に良かったと神が大満足をする話です。

では、中身に入って行きたいと思います。

食物אָכְלָה（オフラー）

最後のアダムによって新しく造られた者は、霊が回復されて、

地上においては、神を表現する神のかたちצֶלֶם（ツェレム）が出来ました

が、その務めを果たしていく能力：（内実דְּמוּת（デムート）似姿）が整っていません。　ですから、神が望まれることを果たせないでいます。

神は内実דְּמוּת（デムート）（似姿）を完成させるために、

29-30 節で、食物אָכְלָה（オフラー）を与えたということです

創世記 1 章 29－30 節

29　神は仰せられた。「見よ。わたしは、地の全面にある、種のできるすべての草と、種の入った実のあるすべての木を、今あなたがたに与える。あなたがたにとってそれは食物となる。

30　また、生きるいのちハッヤー**הַיָּה**のある、地**אֶרֶץ**エレツのすべての獣、空**הַשָּׁמַיִם**ハッシャマーイムのすべての鳥**כֹּל־עוֹף**コール オーフ、地の上を這う**רוֹמֵשׂ**ローメースすべてのもののために、すべての緑**יֶרֶק**イェレクの草**עֵשֶׂב**エセヴを食物として与える。」すると、そのようになった。**

30 節に、地のすべての獣、空のすべての鳥、地の上を這うすべてのもののために、（種の入らない）食物オフラー**אֹכֶל**を与えるということです。**

食物オフラー**אֹכֶל（女性名詞）**

👉語源アーハル**אָכַל**食べる　※この食物**オフラー**אֹכֶל**は、**

口から食べる食物ではなく、私たちの霊が食べる食物です。

人が木や草を食べるでしょうか。

草は食べられても、木は食べられません。

「　日ごとの糧を今日も与えてください　」という「主の祈り」の訳文が記されていますが、「日ごとの糧」は、

私たちが毎日食べるご飯やパンではないと学びました。

「日ごと（ἐπιούσιος（エピウーシオス））の糧」

私たちに必要な、神が定めておられる大切な糧を下さい、という祈りです。神が定めた御国で生きる私たちが「知らなければならない事柄（糧）」を与えてください、という祈りです。

私たちは、たましいで読んできたことを認めざるを得ません。

たましいと霊とを区別することを、

今まで教会で聞いたこともないし、意識もしませんでした。

ヘブル人への手紙 4 章 12 節

神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄を分けるまでに刺し貫き、心の思いやはかりごとを見分けることができます。

神のことばが働くと、関節と骨髄を切り分けるように

霊とたましいが切り分けられ見分けることが出来るとあります。

何のことなのか分からないままでは、信仰生活がどれほど長くて

も、神のことばをほとんど知らないと思った方がいいでしょう。

知っているようで知らないのです。

そして多くの信仰書といわれる書籍や、聖書そのものから逸脱した

教えを土台に聖書を読むので、「理解の型紙」が出来てしまい、

聖書を読んでも、新しい内容が入らなくなってしまうのです。

このような外側の堅い殻は、聖書の真意が内側から開けば自ずと

破られてきます。

イェシュアが宣教を開始するとき、荒野の試みを受けるために、

御霊に導かれて荒野で 40 日 40 夜の断食をされました。

断食とは、神のみことばを食べることに専心することです。

食事をしないことではありません。

その後で試みる者に、イェシュアは語りました。

マタイの福音書４章４節

イエスは答えられた。「『ひとはパン（αρτος（アルトス）：לֶחֶם（レヘム））だけ

で生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことば（ῥήμα（レーマ））で生きる（申８：３では「すべてのことば」)』と書いてある。」

人は霊が生かされると、イェシュアの語ることば（霊の食物）によって生き始めるということです。

霊の食べるパンは、たましいを通さずに、霊でそのまま食べます。

しかし、たましいで、みことばを読むと欲しいものばかりを食べて、堅いもの、食べにくいものは、取り除けたりします。

神は、最初の人（アダム）に、エデンの園にあるすべての木（神の口から出るすべてのことば）から食べよと言いました。

40 年間の荒野生活でイスラエルの民は、神から与えられたמָן（マーン）（天からのパン「キリスト」の予表）を食べました。

天から現れて語られるキリストのことばが、

あなたがたのパンになるようにという予表です。

ヨハネの福音書 6 章 63 節

いのちを与えるのは御霊です。肉は何の益ももたらしません。わたしがあなたがたに話してきたことばは、霊であり、またいのちです。

いのちのことばを一生懸命たましいで読み、研究し、調べていくうちに、たましいが充満して、たましいの分かち合いが蔓延します　。

教会が、霊で受け取り、霊で語り、霊で分かち合いをしなければ、いのちを温存し、いのちを蓄え、いのちを流すことができません。

教会に力がないと、「リバイバル　リバイバル」と祈りますが、霊で受け取とらなければ、霊的な力は、沸き起こりません。

神のご計画と、人間の求めることが噛み合っていないのです。

霊で受け取り、霊で息づくなら、その人は、リバイバルされます。

一人のリバイバルは必ず、周りに影響を与えていきます。

それが「王なる祭司」の務めをするדְּמוּת（デムート）です。

私たちは、神のかたちであるイエシュアを信じて義とされ、

神の子どもとされていても、דְּמוּת（デムート）が完成されていないので、

「いのちを与える者」となれないのです。

そのために、神が食物אָכְלָה（オフラー）を与える話が最後に来ているのです。

イエシュアの数々のことばは、私たちの霊の食物です。ですから、

たましいを通さないで食べることが大切です。

―　神が人に食物を与えられる理由　―

それは、28 節の命令を成就するためです。

創世記 1 章 28-29 節

28　神は彼らを祝福された。神は彼らに仰せられた。「生めよ。増えよ。地に満ちよ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地の上を這うすべての生き物を支配せよ。」

29　神は仰せられた。「見よ。わたしは、地の全面にあるすべての木を、今あなたがたに与える。あなたがたにとってそれは食物となる

人が、御子のように「王なる祭司」としての務め（地を従え支配する）をするためには、内実דְּמוּת（デムート）（似姿）が必要です。

神が人に食物を与える目的は、以下の成就のためです。

1，人が生み　増え　地に満ちるため

2、満ちて、地を従えて、すべての生き物を支配するため

👉「王なる祭司」としての務めです。

これこそ人が創造され、回復される内実דְּמוּת（デムート）です。

内実דְּמוּת（デムート）がなければ、「その地הָאָרֶץ（ハーアーレツ）」は回復しません。

１章２節「茫漠として何もない」その地が回復できないわけです。

神の創造の最後に、内実דְּמוּת（デムート）が回復されるのです。

今も、食物を与え、私たちを「王なる祭司」としていくために

神がとりなし、聖霊の圧倒的な力を与えようとしておられます。

みことばを食べないクリスチャンは、「王なる祭司」の立場はあっ

ても、内実דְּמוּת（デムート）が回復できないのです。

内実を満たすために、

みことばを霊の中で食べ続ける

この意識がしっかりと与えられて、みことばによって生きようと

求め続けることが「聖化」されていくことだと思います。

神はご自身のかたちに人を創造されました。

人を彼らと呼び、祝福して「生めよ。増えよ。地に満ちよ。」

そして、「地を従えよ」「生き物を支配せよ」と命じています。

その地の上に神のみこころが実現するために、人は神の代理者とし

て神に従うことが必要です。　　ここは、すべて命令形です。

命令形

パーラー

生めよפָּרָה

「　多くの実を結ぶ　」

バーラー

贖われた（בָּרָא）水にうごめく魚（異邦人の民：諸国民）と

翼のある鳥（イスラエルの残りの者：ユダヤ人たち）にも同じ命令

が与えられて祝福されています。「人」にも命令されています。

「生めよ」とは多くの実を結ぶことです。

命令形

ラーヴァー

「増えよרָבָה」

数が増えるだけではなくて、イェシュアが「ぶどうの木」のたとえ

で語られました。多くの実を結ばせて、父の栄光を地に表します。

多くの実はイェシュアと一体となることで結ばれます。

一体とは、イェシュアのことばを食べて、

ダーヴァク

イェシュアと一つになる（とどまるדָּבַק）ことです。

父（神殿ユダヤ教）や母（律法主義）を捨てて宗教から離れて

イェシュアと一つになる道を選び取ることで、

多くの実が結ばれます。　内なる決心が実を結ぶのです。

いつも通りは、律法主義と隣り合わせです。

イェシュアと生きたかかわりを持つために、

自分に関係する父母（神殿ユダヤ教、律法主義）を

見捨てる意識が必要です。

パウロもイェシュアを信じたユダヤ人に、

元のさやに戻るな、宗教的なユダヤ教に戻ってはいけない、

そこから出て来いと言いました。　ここがヘブル書の結論です。

ヘブル人への手紙 13 章 13 節

ですから私たちは、イエスの辱めを身に負い、

宿営の外に出て、みもとに行こうではありませんか。

宿営（エルサレムの神殿ユダヤ教）の外にイェシュアがいますか

ら、宿営から出てイェシュアのもとに行こうと促しています。

いのちの道はここしかありません。

聖書が繰り返し語る、多くの実を結ぶ者とは、

イェシュアのみことばを食べ、イェシュアと一つになる者です。

一つになることが、

どのようなことかを示された者です。

多くの実を結ぶことで、父の栄光が、地に表されていくのです。

命令形

マーレー

「満ちよ מָלֵא」

神のご計画を、地において実現することが命じられています。

神の代理者として務めを担う「王なる祭司」は、

みことばによって生かされて、

　世を治めるように、それを実現するように命じられています。

そして地を従え、生き物を支配するため

命令形

カーバシュ

「従わす כָּבַשׁ」

「踏みつけ　制服し　支配する」

ヨシュアに率いられたイスラエルの民は、約束に地・カナンを征服しました。その地を完全に征服しイスラエルの全部族をまとめて支配したのは、ヨシュアからかなり時を経たダビデです。

ダビデは、約束に地に真の安息をもたらす「王なるメシア」の型です。

バラバラになったイスラエル各部族は、周辺諸国から圧力を受けて一つになれません。そこで人びとは、他国のように王様を求めました。　ところが、神が与えたサウロ王は、神の代理者となることができませんでした。

イスラエルの王様は、他国の王とは違うのです。

―　イスラエルの王様は、「神の代理者」　―

ダビデは、神のみこころに適いました。

ダビデの幕屋で礼拝し、神と人がともに住む神殿の構想を練り上げました。すべての準備のために、人々に訴えて賛同を得て、多くの献げ物をしました。神殿建造は、ソロモンが引き継ぎ、ダビデが備えたものを忠実に整えて黄金時代を築きました。

しかし、ソロモンの死後、バビロン捕囚にされていきます。

ソロモンの政策の中に、パン種が入っていたのでしょう。

黙示録 11 章 15 節

この世の王国は、私たちの主と、そのキリストのものとなった。

主は世々限りなく支配される。

（※ホーリーコーラス：天の声々のエコー）

キリストが再臨されると、全地は彼が支配するメシア王国となり、メシアの指導のもとに、私たちも「王なる祭司」として地を支配する者となります。

「あまり感覚がないのでよく分かりません。それが祝福なの？」と軽んじる人は、メシア王国では、無価値な存在になります。

神は人に役割を委ねて、安心して休んでいられる状況を造られるのです。

命令形

「支配せよ רָדָה（ラーダー）」

「人が神の代理者として地の生き物を支配すること」

イェシュアが湖の上を歩く行為も、支配の表象です。

イェシュアが王として地を支配するイメージです。

因みに海の魚は、異邦の民、空の鳥はイスラエルの民、

地上を這うものは、神に敵対する勢力を象徴するたとえです。

メシア王国には、地上を這う獣はいなくなります。

「王なる祭司」

「王なる」とは、権威をもって守っていくこと。

「祭司」とは、神のしもべ。

力のない祭司は無用です。神から与えられる権威を持って、

祭司の務めをする、これが神と人がともに交わることです。

向き合って、顔を見つめ合って、御顔を仰ぎ見て、

愛といのちを通わせながら、実際的に地を支配していきます。

地に神の栄光を現わすために、彼らが神に代わって支配します。

神が委ねきる時が神の安息（休むとき）なのです。

―　食物について　―

「　人の霊に食物として与えられるもの　」

●種（いのち）のできるすべての草

エーセヴ　ゼラ

草עֵשֶׂב　種זֶרַע

種の入った実のあるすべての木：実のある木פְּרִי־עֵץ

エーツ　ペリー

これは地が出来た時には、もうすでにあるのですが、

最終段落で「人」に食べさせます。

イェシュアも食べるし、イェシュアにつながるイスラエルの民、

教会につながる者たちが食べて一体となる、一つになる食物です。

「　人間以外に与えられる食物　」

●種（いのち）のない緑の草

イェレク　エーセヴ

すべての緑יֶרֶקの草עֵשֶׂב

人の霊が食べるべき食物は、種のできる草と種の入った実のある木

です。しかし人以外の生き物たちは、緑の草が与えられます。

食物に種ゼラזֶרַעがあるかないか

種のあるものには　いのち　があり、

種のないものには、いのち　が無い

緑イェレクיֶרֶק 👉 語源「ヤーラクיָרַק唾をかける」恥ずかしめの行為です。神に対して、神を畏れない行為をヤーラクיָרַקといいます。

人とは「男と女」、「キリストと教会+イスラエル」のことです。

「種ゼラזֶרַע＝イェシュア」

種のできるすべての草を与えるとは、

種がすでに入っている草ではなくて、**種のできる**すべての草です。

草に種が入ると、いのちを含むようになります。

モーセの律法のように、「キリストに導く養育係のような食物」です。**モーセに与えた神の律法は、キリストを抜いた形の教え**です。

イェシュア（種）が入って初めていのちを食べられるのです。

種のない状態で提供されているので、それだけ食べてもいのちには至りません。ですから、モーセの律法をパウロは幼稚な教えとしました。　これが στοιχεῖα ストイケイアにつながります。

ローマ人への手紙８章２節

・・キリスト・イエスにあるいのちの御霊の律法（種の食物）が、

罪と死の律法（モーセの律法）からあなたを解放したからです。

パウロは、種の入っていないモーセの律法を、罪と死の律法としました。肉に属する人は、種の入っていない草を、

一生懸命自分の努力で食べているということです。

(1)人(男と女)に与えられる「食物」・・「種」を含む食物
※「種」とは「イエシュア」のこと

a. 種のできるすべての草: キリストに導く養育係のような食物
モーセの律法　幼稚な(初歩の)教え
罪と死の律法　肉に属する人

b. 種の入った実のあるすべての木: 永遠のいのちをもたらす食物
キリストの律法　義の教え
いのちの御霊の律法　御霊に属する人

※aとbの違いをパウロは記しています(ロマ8:2, Ⅰコリ3:1～3, Ⅱコリ3:6, ヘブル5:13～6:1)。

(2)人(男と女)以外に与えられる「食物」「種」を含まない食物
すべての緑の草・・・・キリストのない教え

種の入った実のあるすべての木は、すでに種が入っています。

それは「永遠のいのち」をもたらす食物で、キリストの律法を表し「義の教え」とパウロは言いました。

いのちの御霊（聖霊）は、この食物を私たちに食べさせようとしています。この食物を食べる人が御霊に属する人（大人）です。

この食べ物は堅いので大人の食物です。

クリスチャンも、肉に属する人と御霊に属する人に分かれます。

イェシュアを信じて神の子どもであっても、

幼くて柔らかいもの、乳だけを飲んでいる人、柔らかい食物に

とどまっている人は肉に属する人です。

本当の御霊が与える食物を食べられずにいるので、

いのちを発散することができません。

御霊に属する人は、御霊でみことばを食べる人ですから

いのちをもって「　王なる祭司　」として働くことができますね。

ロマ８：2，Ⅰコリ３：1-3、Ⅱコリ３：6、ヘブル５：13-6：1

👉乳を飲む者と、堅い者を食べる成熟したクリスチャンとの違い

を繰り返し述べています。

たましいで食べる幼子は、いつまでも成長できませんが、

一旦霊で食べ始めると、どんどんどんどん成長します。

イェシュアの言われたことをそのまま受け入れて、

「アーメン！」と食べますから、力を放つわけです。

しかし、たましいのままですと疑問だらけです。

霊から得られる栄養をほとんど吸収できず頭で考えてしまいます。

いのちのないまま食べて理解したつもりでいます。

「　緑の草　」

人以外に与えられる食物は、種の含まない食物ですべての緑の草です。　これはキリストにない教えです。

地では、キリストにない教えを食べている人たちもいます。

人に与えられる食物の中で、種の入った実のあるすべての木とはイェシュア・メシアが語る「みことば」です。

いのちの木であるイェシュアを食べる者は、

永遠のいのちを得る

「　まことに　まことにあなたがたに告げます　」

イェシュアが、ヨハネの福音書で 25 回に渡り表現しています。

ニコデモには、二回も言います。（ヨハネ３：1-15）

「　まことに　まことに　あなたがたに　告げます　」と、

霊のことばを強調していますが、

ニコデモはたましいで聞くので、霊で受け取ることができません。

「・・もう一度、母の胎に入って生まれることなどできるでしょうか。」（ヨハネ３：４）と、尋ねています。

イスラエルの教師であっても、たましいを通せば、イェシュアの語る意味が分からないのです。　これは、他人事ではありません。

イェシュアが「　まことに　まことに　」という箇所をミドゥラーシュしてみてください。

字義通りに受け入れるとどういうことになるか。

ヨハネの福音書 6 章 53・60・66 節

53　イエスは彼らに言われた。「まことに、まことに、あなたがたに言います。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたがたのうちに、いのちはありません。」

60　これを聞いて、弟子たちのうちの多くの者が言いました。「これはひどい話だ。だれが聞いていられるだろうか。」

66　こういうわけで、弟子たちのうちの多くの者が離れ去り、もはやイエスとともに歩もうとしなくなった。

しかし、そのまま信じる人は、いのちを得ます。

イェシュアは、たとえで語り、本当に求める者かどうかを振り分けています。これは、神の知恵なのです。

誰も彼もみんなにわかるようには語られません。

霊のことばで、たとえを語り、共感する人がイェシュアと結びつきます。　誰が結びつくのか、私たちの判断では見極められません。神の選びです。　そして、確実に霊の中で受けとめる人が、一人二人と増えて来るのでしょう。

ヨハネの福音書 20 章 22 節

こう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。

聖霊を受けなさい。

弟子たちに、息を吹きかけて、聖霊を与えて、新しい人間とされる。この実現（πλήρω（プレーロー）：成就）がヨハネ 20 章の宣言です。

そこから教会は始まりました。

五旬節（ペンテコステ）一日で作られたのではありません。

どれくらいの期間、異邦人も聖霊によるバプテスマを受けたのか聖書からはわかりませんが、ユダヤ人と異邦人の聖霊のバプテスマがあって、教会になりました。

エペソ人への手紙 2 章 15 節

様々な規定から成る戒めの律法を廃棄されました。

こうしてキリストは、この二つをご自分において新しい一人の人（one new man）に造り上げて平和を実現し、・・

パウロの語る一つのからだ「one new man」の概念です。

ペテロが「天の御国のかぎ」（マタイ 16：19）で天を開き時間を積み重ねながら教会が成立して、この地に立て上げられました。

ヨハネの福音書 4 章 32 節

ところが、イエスは彼らに言われた。

「わたしには、あなたがたが知らない食べ物אֹכֶל（オーヘル）があります。

「　あなたがたに知らない食べ物אֹכֶל（オーヘル）がある　」

カッコイイ！

私たちの食べ物は「אֲכָלָה（オフラー）（女性名詞）」です。

イエシュアの食べ物は「אֹכֶל（オーヘル）（男性名詞）」です。

なぜ、ことばが違うのでしょう。

ヨハネの福音書 4 章 34 節

イエスは彼らに言われた。

「わたしの食べ物אֹכֶל（オーヘル）とは、わたしを遣わされた方の

みこころを行い、そのわざを成し遂げることです。」

イエシュアの食べ物「אֹכֶל（オーヘル）」は、

わたしを遣わされた方のみこころを行い、

そのわざを成し遂げる　こと

食べ物の話ではないようです。

イエシュアの食べ物と、私たちの食べ物が違うとありますが、

結局は同じものを食べています。

イエシュアは、父のみこころを行い、わざを成し遂げる食物です。

私たちはイエシュアが語る食物を食べますから、御父からきています。　すべて同じものです。

私たちの食物が女性形なのは、教会とイスラエルが女性形だからです。　イエシュアは男性なので男性名詞です。

地から出たすべては、御子を通して教会が食べる食物でつながります。　そうでなければ、「王なる祭司」として、

私たちはその務めを地ですることが出来ないのです。

ヨハネの福音書 6 章 54—58 節

54　わたしの肉を食べ（הָאֹכֵל（ハーオーヘール）「食べる者：冠詞付きの分詞」)、わたしの血を飲む者は、永遠のいのちを持っています。わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます。

55　わたしの肉はまことの食べ物אֹכֶל（オーヘル）、わたしの血はまことの飲み物なのです。

56　わたしの肉を食べהָאֹכֵל（ハーオーヘール）、わたしの血を飲む者は、わたしのうちにとどまり、わたしもその人のうちにとどまります。

57　生ける父がわたしを遣わし、わたしが父によって生きるように、わたしを食べる者も、わたしによって生きるのです。

58　これは天から下って来たパンです。先祖が食べてאֹכֶל（オーヘル）、なお死んだようなものではありません。このパンを食べる者הָאֹכֵל（ハーオーヘール）は永遠に生きます。」

食べるとは、食べ物と一体となることです。

イエシュアの血や肉を食べるとは、イエシュアと一つになることです。

この一つになることを「とどまる」としています。

イェシュアが、父の食物を食べるとは、

父と一体となること、　相互内在です。

私たちもイェシュアの食物を食べることで、イェシュアと一体となります。イェシュアと一体となることで、内実דְּמוּת(デムート)似姿が整い、「王なる祭司」としての務めが出来るのです。

コロサイ人への手紙 3 章 16 節

キリストのことばが、

あなたがたのうちに豊かに住むようにしなさい。

あなたがたのうちにとは、私たちの中心である霊の中です。

「　キリストのことばが、豊かに住むようにしなさい。　」

キリストのことばを食べるしかありません。

霊の中で、

「キリストのことばを食べる」は、「主を食べる」と同義です。

ところで、

神は人を創造したときに、園にあるいのちの木について

何と言いましたか。

創世記 2 章 16 節

神である【主】は人に命じられた。

「あなたは園のどの木からでも思いのまま食べてよい。

「思いのまま食べてよいתֹּאכֵל (トーヘール) אָכֹל (アーホール)**」とは、あなたが好きに選んで適当に食べてなさい、という意味ではありません。**

אָכֹל (アーハル)**「食べる」が「不定詞+未完了形＝強調」によって重ねられています。**

「あなたは園のすべての木から大いに食べてよい」と訳せますし、

「あなたは園のすべての木から必ず食べなさい、

一つも漏れることなく必ず食べよ」という命令形にもなります。

このように、聖書は最初から、食べる事を強調しています。

善悪の知識だけを取って食べると、善悪の知識の木と一体となります。　神はそれだけを取って食べると死ぬと警告されました。

サタンは、神の命令を捻じ曲げて、限定して食べさせることで、

合法的に彼らを支配することができるようにしてしまいました。

人は騙されて、神と交信する霊が機能不全になってしまうのです。

サタンの思惑通り、取返しのつかないことになりました。

そのために、神は多くの時間をかけ、年月を重ねながら、

ご計画の準備をされるのです。

―　主を食べる方法　―

では、主をどのように食べたら良いのでしょうか。

エレミヤ書 33 章 3 節

わたしを呼べ。そうすれば、わたしはあなたに答え、あなたが知らない理解を超えた大いなることを、あなたに告げよう。」

「わたしを呼べ」という行為は、霊的行為です。

イェシュア　シェーム
יֵשׁוּעַ שֵׁם　とは、霊から発する祈りです。

神はその祈りをキャッチします。

おまじないのようですが、信仰が働かされると気付きます。

私たちに与えられた鍵はこれしかないと。

ここを把握しますと、心から感謝して神のことばを理解して食べるようになります。　　すべてに勝る「イェシュアの御名」

イェシュア　シェーム
יֵשׁוּעַ שֵׁם。

霊が開き、みことばが光輝きます。

私たちは霊を用いて主を食べるのです。

神学者が様々に語るとしても「イェシュアの御名」を呼び求めなければ、いのちのない文字のことばです。

論理や、理性に訴えかけたとしても、いのちはありません。

神のことばは霊でありいのちですから、説明できなくても、

その人の中に働き始めて、実体化されていくのです。

上手に説明できなくても、ああ分かった！という感じです。

霊が喜んでいます。

しかし、たましいでは、霊の喜びはなく、たましいの自己満足で終わるでしょう。

この感覚は少しずつ経験されてくると思います。

「イェシュアの御名」を呼び求めて、

みことばを読むとどのようになるか、アシュレークラスで是非味わって頂きたいと思います。

主の名を呼び求める、主を食べる、主のことばを聞く、

あるいは尋ね求める、

そうすると「みことば」が蜜のように甘く感じてくるものです。

エゼキエル書３章３節に

・・私（エゼキエル）がそれ（トーラー）を食べると、

それは口の中で蜜のように甘かった。

セレブレイト・スッコート「　仮庵の祭り　」は、神のみことばが蜜のように甘く感じるように食べる期間でもあります。

ですからユダヤ人たちは、子どもたちにトーラーが甘いものだと教えるために、一つのたとえとして、甘いものを出すようです。

みことばそのものが甘く感じる様子を「蜜のように甘かった」と表現している箇所が聖書にはいくつかあります。

みことばが甘いという感覚も霊の中で味わうたとえです。

甘く感じるのは、私たちの舌ではなく、霊の中です。

甘く感じたことばは、私たちを元気付け、健やかにします。

詩篇 19 篇 7-10 節

7　主の教えは完全でたましいを生き返らせ

主の証しは確かで　浅はかな者を賢くする。

８　主の戒めは真っ直ぐで　人の心を喜ばせ

主の仰せは清らかで人の目を明るくする

9　主からの恐れはきよく　とこしえまでも変わらない。

主のさばきはまことであり　ことごとく正しい。

10　それらは　金よりも　多くの純金よりも慕わしく

蜜よりも　蜜蜂の巣の滴りよりも甘い。

詩篇は預言的です。キリストが予め設定されて書かれています。

イエシュアの語ることばの本質を預言しています。

詩篇１篇「　幸いなのはその人　」の「　その人　」が

イエシュアです。イエシュアがなければ、単なる文字です。

何の励ましもありません。

イエシュアがいなければ、この詩篇は意味を持たない構造です。

最後に、

メオード　トーヴ

טוֹב מְאֹד

「非常に良かった」

神の満足である神の満たしが表されています。

創世記 1 章 31 節

神はご自分が造ったすべてのものを見られた。

見よ。それは非常に良かった。

夕があり、朝があった。第六日

メオード　トーヴ　ヒンネー

הִנֵּה־טוֹב מְאֹד

「見よ。それは非常に良かった」

トーヴ　キー

第二日を除く他の日は、神は良しכִּי־טוֹבと見られたとあり

メオード　トーヴ

第六日に至ってはטוֹב מְאֹד非常に良かった、はなはだ良かった、極めて良かった、素晴らしいものであった　です。

まさに神の感動と満足と喜びが伝わってきます。

ヴォーケル　ヴァイェヒー　エレヴ　ヴァイェヒー

וַיְהִי־עֶרֶב וַיְהִי־בֹקֶר

「　夕があり、朝があった　」

それぞれの日には、創造のリズムをあらわすフレーズ

「夕があり、朝があった」は第六日が最後です。

第七日：2 章 1 節～3 節は、昼のままで夜がありません。

夜が来ないのです。　「　昼　」とは、お昼間の概念ではなくて、

「　神の栄光が現される　」ことです。

第七日は、終日、神の栄光が照らされる世界を表しています。

ヨハネの黙示録 21 章「新しいエルサレム」も同様です。

ヨハネの黙示録 21 章 23―25 節

23　都は、これを照らす太陽も月も必要しない。

　　神の栄光が都を照らし、子羊が都の明かりだからである。

24　諸国の民は都の光によって歩み、

　　地の王たちは自分たちの栄光を都に携えて来る。

25　都の門は一日中、決して閉じられない。

　　そこには夜がないからである。

人が、神の与える食物を食べて「王なる祭司」の務めとして、

地を支配するので、神は満足するという話です。

御国での私たちの務めは、「王なる祭司」です。

果敢な行動です。

暇を持て余すようなイメージはたましいの理解かもしれません。

今回のまとめ

神がご自身の「人：イェシュア＝第二の人」を創造されたのは、

地を回復して天と地を一つにするためです。

この「人」に女がいます。　教会とイスラエルの民です。

茫漠とした地を回復するために、

「人：第二の人」を信じる新しく造られた者たちを、

御子のかたちと似姿にする必要がありました。

そして、新創造された「人」に主権を与えて地を支配させ、

統べ治めさせるために、種の入ったすべての木を食物として与えたのです。　その木とは「いのちの木」です。

人は「いのちの木」を霊の中で食べることで、

神の「ご計画　みこころ　みむね　目的」を実現するようにされます。

ヨハネの福音書 15 章 5 節

人がわたしにとどまり、わたしもその人にとどまっているなら、

その人は多くの実を結びます。

イェシュアがとどまるのは、

私たちの最も深いところ「人の霊」の中です。

サタンが決して立ち入れないシークレット・プレイスを

神が造られ、ここからすべてを始めてくださいます。

人の霊の中にイエシュアがとどまるために、

神の一連の出来事、「　受肉から始まって　昇天　着座　内住（私たちの中にいる）　」　が不可欠でした。

回復の始まりは、心ではなく私たちの霊からです。

ですから、霊の中で生き続けるために、霊の中で、いのちのみことばを食べることがとても大切なのですね。

霊の中で生きて　霊の中で食べる

ボロボロと目から鱗のようなものが落ちてきて、

私たちの中で心の目が開かれてくることでしょう。